

武蔵野大学学術機関リポジトリ Musashino University Academic Institutional Repository

市民に対して被害者支援の話をするとき、専門家は 何を語るべきだろうか

著者	辻 恵介
雑誌名	武蔵野大学心理臨床センター紀要
号	17
ページ	55-59
発行年	2017-12
URL	http://id.nii.ac.jp/1419/00000706/

■ エッセイ

市民に対して被害者支援の話をするとき、 専門家は何を語るべきだろうか

辻 恵介¹⁾

1) 武蔵野大学人間科学部

講演の依頼は、大概、断りにくい形でやってくる。知り合いからの伝手だったり、過去にこちらがお世話になっていたり、断られたら困るんですという強烈なオーラが放射されていたりで、受けざるを得ない場合も多い。だいたいわたしのところに依頼に来るくらいだから、よほど引き受け手がなくて困っているのだろうなどと、仏ごころを出してしまった日にはもうお釈迦である。そこに持ってきて、義理や人情や成り行きから、関わりのある分野は年齢とともに広がっていくので、もともと自分の専門領域以外の分野で講演する破目になることも少くない。社会や歴史、人生などについて含蓄のある話をされていた昔の先生方は本当にすごいと思う。確かに、臨床心理学や精神医学は、世の中の諸々の事象を読み解く導きの糸になり得るはずだが、くたびれた一学徒にかつての碩学の真似などできようはずがない。挙句に、大まかな分野の指定があるだけで、内容は先生にお任せします、と丸投げされることもある。それでは芝浜でもやりましょかとおぼけて、煙に巻いてやろうかと思うこともあるが、ああそれはよいですね、ぜひよろしく願いますなどと言われたら、いよいよもって万事休してしまうので、自棄になる度胸もない。初老男は情けないのである。

今にして思えば、武蔵野大学にやってきたのが縁だったのだろうが、十数年前から被害者支援に関わるが増え、このテーマで一般向けの講演を依頼されることも増えた。被害者支援の機運が社会的に高まってくるのは素晴らしいことだし、市民を啓蒙して被害者支援の裾野を広げていくことの意義も大きいし、セミプロ的に心理臨床に関わっている方々（例えばボランティア相談員や警察関係者など）の技能を底上げしていくことも大切なので、そうした講演が行われるのは、とてもよいことだと思う。犯罪は犯罪でも加害者の心理を読み解く方に軸足を置いている立場からすると、自分が話してよいのだろうか躊躇する気持ちもあるが、前段のような流れで、結局、マイクを握ることになる。

ここで、一般の方々に、被害者支援のなにを伝えるべきか悩むことになるが、限られた講演時間の中で、あまり専門的なことに踏み込んでも議論が空転しかねないし、さりとて漠然と隣人愛を説くのは臨床家の役回りではなかろう。まずは、二次被害を与えずに関わることの必要性を再確認した上で、敬して遠ざくといった態度にならず、一步踏み込んだ支援をすることが大切であると話すことになろうか。また、心理臨床の初学者の中には、治療の枠を守ることを重視し過ぎて必要以上に被害者から距離を置こうとし、結果的に被害者を傷付けてしまう向きもあるので、そうなりそうな方々がいそうなときには、その点についての注意もしておきたい

なる。被害は誰の身にも起き得るので、基本的に被害者はもともと健康な人だと思って接してよく、もし被害者がパーソナリティ障害などの問題を抱えていて関係性が難しくなったら、そのときはわれわれ専門家が介入してなんとかするから、安心して被害者と関わって欲しいと話することになる。

要は、一般の方々に対しては、被害者も自分達と同じひとりの人間なのだという極めて単純なことを強調することになるが、じつはこれは深い意味を持つことなのかも知れない。被害者は、人間ではなくものとして扱われたと感じることでその傷を深め、ものとしてではなく人間として扱われていると思えることで、回復を速めるのではなかろうか。

個人的な体験で恐縮だが、以前、ある殺人事件の精神鑑定をしていた際に、一瞬の隙を突かれて被疑者に攻撃され、手拳と膝蹴りを受けてしまったことがあった。別段、大けがはしなかったものの、衝撃、羞恥心、前歯を失った喪失感、馴れからくる油断や増上慢への後悔などは当然として、わたしにとってはそれなりの被害体験だった。そして、その直後の警察や病院でのやり取りの中で、意外なほど気持ちを楽にしてくれたのが、「われわれだって一発食らったら反撃に出られないですよ」という強行犯の刑事の言葉であり、わたしのカルテを手にしたときに「あ、わたしと同期ですね」と呟いた歯科医の言葉だった。もちろん、わたしが心配する間もないうちに、検察官や刑務官が非常に親身になって諸々の事後的な処理を手早く片付けてくれたことにも救われたし、なにより動ずることなく事態を受け止めてくれた妻に負うところは大きいですが、ここで指摘しておきたいのは、刑事や歯科医の言葉が、わたしをひとりの人間として扱ってくれているように見え、そのことがわたしに自尊心を保たせてくれたし、不安感を軽減し、こころ強くもしてくれたということである。

加害者や周囲からもののようによかれ、人間として遇されないことで、被害者は一層深く傷付き、回復を阻害されもする。これはなにも、強制収容所での生活を経験した人々や、性犯罪の被害者に止まらず、被害者全般に言えることだろう。こうした主題について論じる欧文にときどき出てくる“depersonalization”（ないしそれに類する諸言語の単語）に対し、単に「離人症」という訳語をあてるに止まらず、この意味合いも含めて訳出した方がよいのではないかと思うことがあるが、このあたりの概念を操ることにかけては、島国の中で比較的平穏に暮らしてきたわれわれの言葉より、国境を接する異国とせめぎ合ってきた——例えば欧州の——人々の言葉の方が、つまり“depersonalization”をもたらす体験をすることが多かった人々の言葉の方が、一日の長があるのかも知れない。おそらく彼らは、“depersonalization”という一語によって、症状としての離人感と、主体性を剥奪されるという被害の本質的な体験の双方を感得するのではなかろうか。この点で、どうも「脱人格化」や「非人格化」といった訳語だけでは、今ひとつ落ち着きが悪く、説明なしに用いると意味が通じないように思えてならない。

一般の方々に対して被害者支援の講演をするときに、わたしが本当にやりたいことは、被害という概念を、主体性の喪失という観点から再定義した上で、1人1人の市民にながでできるのかを伝えることなのだと思う。もちろん、せっかく被害者支援に関心を抱いて話を聞きにきてくれた方々を退屈させるのは本意ではないので、面倒な話は割愛し、わかりやすい話を目指すことになるが。以下に挙げるのは、平成28年11月29日に宇都宮市で行われた平成28年度犯罪被害者支援県民のつどい（主催：公益社団法人被害者支援センターとちぎ）の基調講演で、『被害者に対しわたしたちに何ができるかを考える』と題して話した際の講演要旨である。一般向けの講演

でこんなことを話していますと公開するのは気恥ずかしくもあるが、エッセイとしてご笑覧いただければ幸いである。

* * *

1 被害者は“普通の人”

被害者は特別な人ではなく、わたしたちと同じ普通の人です。わたしたちもわたしたちの家族も、いつ事件や事故に巻き込まれて被害者になってもおかしくないのです。被害者の抱える苦しみを自分の身に置き換えて考えることは、被害者に対してわたしたちにできることの第一歩でしょう。

事件や事故のことを無責任な口さがない噂話のネタにしたり、報道に怖い物見たさの好奇心を満たすことを求めてしまったりすると、被害者を余計に苦しめます。自分や家族が同じ目に遭ったらと考えれば、興味本位の眼差しがどれほど被害者を傷つけるか想像できますが、この点への配慮などは被害者支援の基本中の基本です。

2 被害者の粗さがしをしない

人間は弱い存在ですから、自分や家族が被害に遭う可能性を常に真剣に考えていると、おちおち生活できません。そのため、わたしたちは無自覚なうちに、自分や家族が被害に遭うことはないだろう、なぜなら自分や家族には被害に遭う理由がないから、と考えて日々を暮らしています。しかし、この考えは、被害者はなにか非があったから被害に遭ったのだという考えに繋がり、事件や事故で苦しんでいる被害者をさらに苦しめる原因になります。わたしたちが気をつけないと、被害者は事件や事故の後にも二度三度と傷つけられてしまうのです。これを二次被害といいます。被害者に対しては、二次被害を与えないよう注意して関わる必要があります。

夜道で女性が性犯罪の被害に遭ったなどというときに、被害者の粗さがしをしていませんか。夜遅くに一人で歩いているからだとか、最近の女の子の服装は露出が多いとか。しかし、まったく隙のない人が被害に遭うこともありますし、仮に被害者に隙があったり脇が甘かったりしても、襲われて構わないということにはなりませんよね。

3 二次被害を防ぐ

わたしたちは、おそらく根っからの悪人ではないでしょうが、多少は欠点もあるはずですし、それが普通の人間です。被害者の粗さがしをしないことが大切で、これが二次被害を防ぐことに繋がります。被害者は普通の人間なのです。

二次被害というと、被害者から事情を聴取するときに配慮が足りなかったなどと言って、警察や検察が槍玉に挙げられることが少なくありませんが、わたしたち一人一人の市民も、被害者に二次被害を与えないよう気を付けなければなりません。

4 被害者の困難を知る

被害に遭えば、その被害の直接的な結果として病気や怪我をする場合もありますが、ストレスによって心身両面の健康を損なう場合もあります。高血圧や糖尿病のような生活習慣病も悪化し

ますし、酒量が増えることも珍しくありません。

大きな事件・事故の後には、必ずと言ってよいほどPTSDという病気が話題に上ります。実際には、被害に遭えば必ずPTSDになる訳ではなく、うつ病や恐怖症、胃潰瘍、高血圧、自律神経失調症、蕁麻疹、円形脱毛症、アルコール依存などさまざまな病気になる場合がありますし、苦しんでいても病気にならないこともあります。PTSDについて学ぶのは、被害者の心理を知る上で重要です（ここでは紙幅の関係で省略しますが、機会がありましたらPTSD関連の成書なども手に取っていただければと思います）。

被害に遭えば、苦痛を覚え、病気になるだけでなく、いろいろなことができなくなり、生活に困難が生じます。学生なら成績が低下し、受験生なら志望校のランクを下げなければならないかも知れません。社会人なら仕事を続けられなくなり、退職を余儀なくされるかも知れません。知り合いに会ったときに挨拶を交わしたり話をしたりするのが憂鬱で、出不精になる場合もあります。事件や事故の後に家族で支え合うことができれば素晴らしいですが、家族関係に隙間風が吹き、喧嘩をすることもありますし、なかには離婚に至ることすらあります。

卑近なところにも、被害の影響は現れます。例えば、被害者は、近所のスーパーの安売りに行けなくなることも少なくありませんが、そういうちょっとした影響も、積み積みれば生活をかなり不自由にしてしまいます。経済的な負担が掛かることも忘れてはなりません。これはなにも直接的な金銭的被害や、防犯のための出費に限りません。警察や検察での事情聴取には時間が掛かりますが、その帰り道にスーパーに寄って食材を買い、帰宅してから夕食を作るだけのエネルギーは、当然ながらありません。ほか弁を買って帰るにしろ、コンビニのお惣菜を買って帰るにしろ、出前を取るにしろ、普段の生活よりお金が掛かります。自営業なら、お客さんの代わりに取材のマスメディア関係者ばかりがお店にきたり電話してきたりで、商売にならないかも知れません。

5 一歩踏み込んで支援をする

深刻な被害に遭えば、それまでの人生で経験したこともない事態に遭遇して戸惑います。周囲から、なんでもしますよと支援を申し出られても、なにを頼んだらよいかわかりません。支援を求めに行くのにも一苦勞ですから、一歩踏み出した支援が必要になります。例えば、支援に関するパンフレットを作っても、役場の窓口においておくだけでは、本当に支援が必要な人の手には届きません。辛いときには窓口に来ることすらできないのです。だから、具体的にできることを提示して、一歩踏み込んだ支援をする必要があります。被害に遭うと、当たり前のことができなくなります。当たり前のことをできるように支援することが重要です。

6 被害者の心理を知る

どんな被害でも、被害に遭えばなにかを失うことになります。大切な人かも知れないし、平穏な生活かも知れないし、仕事かも知れないし、将来への希望かも知れませんが、とにかく何かを失います。そして、その分、自信がなくなって自己評価が下がり、悪い方に悪い方に考えるようになります。自分の話が相手に伝わっている自信もなくなりますから、同じことを何度も繰り返し話し話してしまいます。被害者が同じことを繰り返し話すのは、繰り返し話すことで癒されていく

からでもあります。うまく話せている自信が持てずに繰り返し話すからでもあります。

したがって、被害者が繰り返し話すときは、基本的にそのまま繰り返し聞けばよいことになります。被害者自身が、自分が同じ話を繰り返すことに戸惑う場合もありますが、そのときには、「被害に遭われると、皆さんそうなんですよ。わたしでよければ繰り返し聴きますし、繰り返し話すことに意味がありますから、安心して話してください」と言えばよいのです。

また、自分が価値のない人間に思えると、自分を責める必要がなくても自分を責めてしまいます。自分を安売りしてしまい、さらなる被害を受けることに繋がる場合もあります。DVや性犯罪の被害者が、新たなパートナーを探すときに縁でもない相手を選んでしまい、再び被害を受けてしまうことがあるのもこのためです。

7 被害者の勇敢さに気付く

わたしたちはどのような姿勢で被害者に接したらよいのでしょうか。被害者は、ただでさえ自信をなくして自分を低く見積もっていますので、被害者を無力な弱者と見なしてはいけません。支援が必要な弱者であるのは確かですが、無力な弱者として扱うと、言葉に出さなくても伝わり、被害者が自分のことを無力で駄目な人間だと思ってしまい、回復が遅れますので気をつけなければいけません。口に出さなくても、被害者は辛い状況と戦っている勇敢な人達なのだという視点を持てば、低下している被害者の自己価値観を回復させることに繋がります。だから、被害者が裁判で証言をして、加害者に裁きを受けさせることに一役買うことなども、回復を後押しすることになります。被害者にとって、加害者が怖い対象であることは少なくありませんが、裁判に参加することは、裁判を通して加害者の現実の姿を知ることにもなり、加害者が正体不明な怖い存在ではなくなって、恐怖感を克服することに繋がるのです。

8 おわりに

被害者ひとりひとりが、個性を持った人間ですから、被害に遭った後のこころの動きにも個人差があります。しかし、被害に遭ったことで、共通して生じる困難やこころの動きもあります。被害者の抱える困難や心理を学び、かつ、目の前の被害者と1対1の人間同士として向き合い、二次被害を与えないよう注意して関われば、それが支援に繋がります。

本日は拙い話にお付き合いくださりありがとうございました。被害者に対しわたしたちになにができるか考えつつ、またどこかでご一緒できればと思います。これからもよろしくお願いいたします。